

おかしな二人 逝ってしまった、あんなにも笑いをくれた二人。2018年9月
眞鍋由比

平成最後の夏は、劇作家ニール・サイモンと漫画家さくらももこが急逝するというビッグニュースで終わりました。

『おかしな二人』ハヤカワ演劇文庫2006年 は最高に面白い舞台劇。大学時代にジャック・レモンとウォルター・マッソーの名コンビの映画をビデオで何度も観ました。ユーモラスでリズミカルな二人の名優のかけ合いに何度もおなかを抱えて笑いました。潔癖症のフィリックスは（当然ともいえますが）、奥さんに逃げられます。そしてポーカー仲間のオスカー、彼がまたとつくに奥さんに逃げられているんですが、腕利きの新聞記者で、フィリックスの自殺を心配して二人で同居を始めます。親友思いだが大雑把なオスカーと完璧な凝り性のフィリックス。8室もある大きなアパートなのに、もちろん二人は衝突して、自殺を心配していたのに殺してしまいそうになるほど、いさかいをするようになります。何とも愉快的な二人の演技は何度見ても飽きませんでした。

名優二人は既になく、劇作家は彼の名を冠する劇場を残して去りました。この作品は日本人や女性に翻案されて舞台化もされているようですが、ぜひ機会があれば映画、観てみてください。

さくらももこは日曜夕方6時の『ちびまる子ちゃん』でご存知ですね。雑誌「りぼん」の連載が決まるまではなかなか漫画のスタイルが確立できず、漫画とエッセイがいっしょになった独特の語り口が認められたのは、いまでは当たり前のエッセイ漫画のはしりだったのではないのでしょうか？昭和時代のまるちゃんももこさん自身で（実際にたまちゃんのモデルもいて、大親友だったそうです）、するどい突っ込みに思わず笑いがこぼれる楽しい漫画でした。

彼女のはイラストも文章も超絶技巧という感じではないのですが、気づかずにするりと心になじんでくるところが絶妙な曲者といえる巧みさ。

彼女が高校2年の時に一目ぼれした絵本作家がエロール・ル・カイン。東洋と西洋の血を引く、繊細な絵を描くグリーンウェイ賞作家は47歳の若さで死んでしまい、とうとう彼には会えないままだったんですが、彼の知り合いに取材のため会いに行くイギリス旅行の話が『憧れのまほうつかい』新潮文庫1998年 です。

ウェッジウッドの工場に見学に行っていて絵付けをしていたら、みんなに注目されて「シー・イズ・ジャパニーズ・フェイマス・カートニスト」と言われるのが聞こえ、筆が震えてしまったり（でもそのお皿、とてもきれい）、ル・カインの本に解説を書いているキールさんのご自宅に招かれたのに、居眠りをしてしまい、その時した質問が「豆菓子を食べていいか」「トイレはどこか」だけで申し訳なかったり、こじやれたホテルに泊まったけど、ポヤ騒ぎで避難しようとしたらホテルの従業員が一番初めに逃げたり、と珍道中が続きます。ロンドンのホテルにでてきたうどんの話も笑えますので、ぜひ。

彼女は高校入学したとき、新しいカバンを買わなくていいから、いわさきちひろの全集（2万3千円）を買ってほしいと母に頼み、ぼろいカバンを通して、周りに笑われても、穴があいたらお姉ちゃんのお古で乗り切ったという絵に対しては強い意志の人。そんな彼女の愛したル・カインの絵本、本校には6冊あります。

ね、うし、とら・・・十二支のはなし（中国民話より）キャッツ ボス猫・グロウルタイガー絶体絶命（ノーベル文学賞受賞 T・S・エリオットの詩）
The Snow Queen（アンデルセンの雪の女王）いばらひめ（グリム童話より）
おどる12人のおひめさま（グリム童話）まほうつかいのむすめ（まるでかぐや姫のようなむすめ、とても美しい）

どことなくさくらももこの作風に通じる部分があります。見てくださいね。